



ambivalence

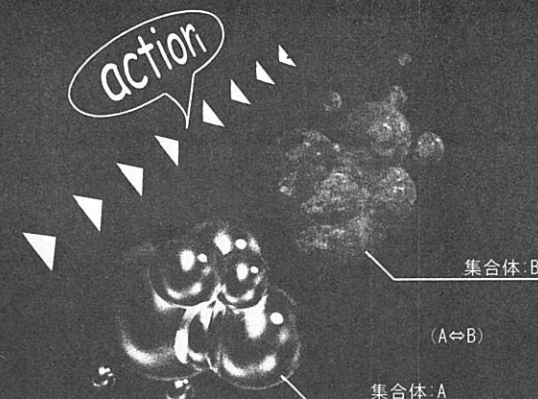
k98035 櫻井 理樹

1

CONCEPT AMBIVALENCE

現代社会における実感にもとづいた直接的な経験と、記号的な経験の間の乖離。あるいは身体的な行動と、インターネットのように媒介された行動の乖離がますます大きなものとなっているのではないだろうか。ドッグイヤー感覚で、高度情報通信社会が我々の生活環境を変えつつあり、IT革命は、空間や場所を限定しないテクノロジーである。空間的制約を持つ都市において、制約を超えた活動が今後、普及するかのごとく見え、都市の解体につながるように見える。しかしながら、バーチャルでサイバーな電子情報が整えば整うほど、我々は親密でウェットな環境を求めているのではないだろうか。

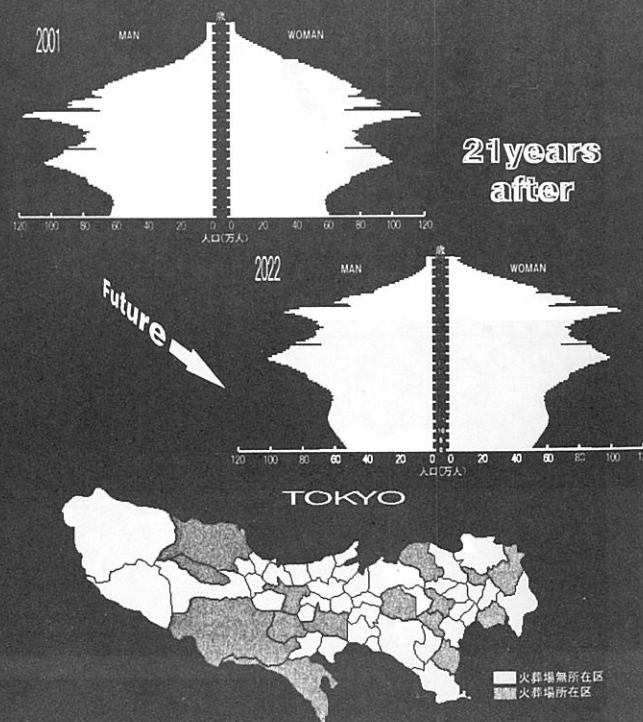
人工の建造物の中で機械的生活をし、無意識のうちに本来の自然感覚を失っている現代の都会人において、真に自然を意識することはどのようなものであるか。〈死体〉というのは、〈都市のなかのリアルなもの〉と布施英利氏が言うように、人間の有機性、肉体の持っている自然性を都市において認識する場、生と死を含有する場、としての建築提案。



KEYWORD LIFE&DEATH

2

相反するもの（生⇄死、自然⇄人工、リアル⇄バーチャル等）、一見矛盾する関係に目を向けることで、見えるものがあるのではないだろうか。



3

PROCESS

人は、実在の世界と、観念の世界をもっているのならば、われわれにとっての肉体は近いと同時に遠くにも感じられる存在である。つまり、常に相反する状態にあるともいえる。誕生から死までを過程としてではなく、相反するものとして捉え、死を隠し、忌み嫌う傾向にあるのが現代都市なのではないだろうか。サファリパークで、老夫婦がトラに襲われるという事件があったように、自然から「遠く」なってしまった暮らしのなかで、我々は自然感覚を失ってしまったのではないだろうか。自然感覚を取り戻すこととは、人間の肉体を意識すること、生死を意識することではないだろうか。死を隠すことではなく、凝視する。その凝視の向こうに見えるものがあると考え。都市の人間が生死を身近に想起できる場を考察する。

指導教員：伊藤 洋子 教授

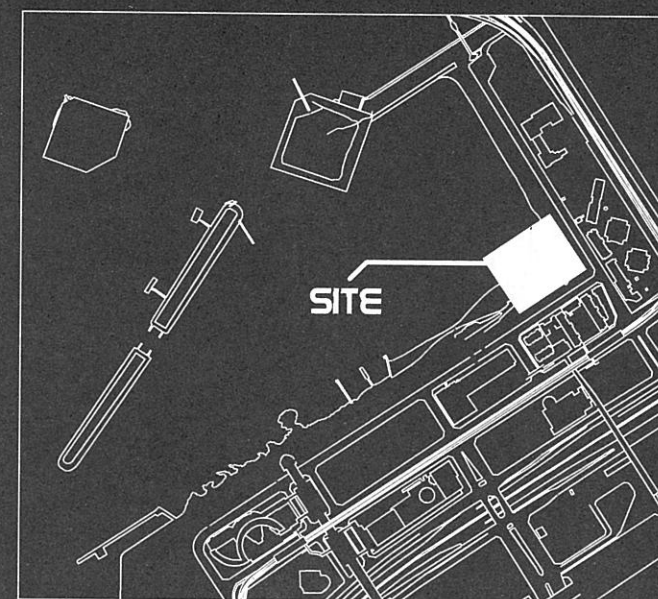


AMBIVALENCE LIFE&DEATH

http://www.odaiba-project.ne.jp
/a funeral hall
/a waiting hall
/crematory/

LOCATION ODAIBA

4



お台場海浜公園は江戸時代に造られた砲台跡であり第三台場（国指定史跡）から、入江を砂浜や磯辺で囲む公園である。砂浜遊びや釣り、ウィンドサーフィンなどが楽しめ、レインボーブリッジや品川の埠頭を行き交う船、対岸の浜松町・田町などの高層ビルを眺望できる。また、お台場公園（第三台場）から潮風公園を結ぶ約1.5kmを、松やコナラの緑道で結んでおり、ジョギングや散歩コースとして利用することができる。丘側はフジテレビや日航ホテル東京、デックス東京ビーチなどが建っており、都会の中のリゾート地といった雰囲気をかもしだしている。臨海副都心は我々の知らないうちにさまざまな建物が建ち並び、都市が形成されようとしている。

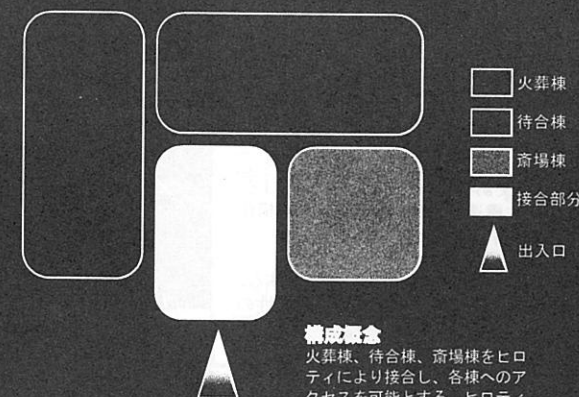
海は万物の誕生の場であるとともに再生の場でもある。この浜は人工的にできた浜である。一見自然の海と対峙する関係にあるようにみえるが、都市空間における数少ない自然と対話する場と考えることができないだろうか。自然と人工、陸と海、二極の中間的ゾーンに計画地を設定することで、これら二つのあいだをつなぐ空間形成を試みる。

人々の意識化にある、母なる海への回帰。人間の生死の自然循環を意識できる場。都市の人間が生死を想起できる場としての提案。

5

PLAN

葬斎場



構成概念

火葬棟、待合棟、斎場棟をヒロティにより接合し、各棟へのアクセスを可能とする。ヒロティに求心性を持たせることによる葬斎場の空間演出を図る。

